

### 市瀬由自先生の思い出

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

29

(開始ページ / Start Page)

61

(終了ページ / End Page)

77

(発行年 / Year)

1999-03-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025755>

---

## 市瀬由自先生の思い出

---

### 市瀬由自教授と半世紀に亘るお付き合いから

三井嘉都夫（法政大学名誉教授）

1928年4月3日長野県下伊那郡に呱呱の声をあげた市瀬由自先生は地元の小・中学校（旧制）を終るや青雲の志を抱いて1948年恩師故多田文男先生が東大と兼務しておられた資源科学研究所へやって来る。当時、東京は敗戦の色濃く、住まうに家なく、食べるに米なく、着るに衣類無しとの状況であった。資源科学研究所と云うのは1941年12月8日文部省の直轄研究所で、地理、地質、植物、動物、人類部門を擁する東大の理学部的研究所のような性格をもって青山高樹町で発足したが空襲で高樹町の建物は焼失してしまった。また軍に協力したと云うことで終戦とともに文部省の直属から離され、以後財団法人として新宿区百人町にあった陸軍の毒ガス研究所跡の建物を受け、1970年まで文部省の助成金によって所員は研究を継続して来た。若い研究者としての市瀬先生もその一人となり、外の焼けトタンの下で寝るよりは汚くとも研究所の地下室で寝た方が良いと云うことで、地質部門の松井健さん他とともに地下室を分轄して貰い、もぐら生活が開始された。しかし、その研究所と云うのは建物は汚なく、給料は安くとも、研究員達は研究に熱心であるとともにお互いが和気藹々としていた。多分市瀬青年もその雰囲気から惚れてしまったのではなかろうかと筆者は想像する。地下室に寝起きしておれば二階にあった研究室には誰よりも早く出勤出来るし、遅くまで勉強も出来る。松井健さんの話によると、市瀬青年も地下室で悶々として青春の焰を燃やしていたなどとよく語ってくれたものである。

こうした生活は当時法政大学に1937年から開講されて来た高等師範部地理学科（夜間のみの授業）入学には大変都合良かった事と考えられる。

昼は資源研の地理学研究室で研究仕事に従事し、夜は大学で講義を聞く、一挙両得ということであろう。勿論一般的には一人二役の仕事であるから、苦から輩出する気鋭の選手でなければ目的達成は難しいことは云うまでもない。市瀬先生は苦を苦とも思わず1948年4月には高等師範部に入学し、1951年3月高等師範部第12回生として卒業された。当時大学改革で新制大学が発足しており、市瀬先生はその年、新制第3回生として編入し、1953年3月卒業。この年、日本地理教育学会主催による全国地理学科生の卒論コンクールが開催され、法政大学を代表して市瀬先生は「伊予西條平野の地下水」と題して発表し、優秀賞を授与された。いよいよ研究に力が入った市瀬先生は、その年設立された地理学科大学院修士課程に進学され、1956年3月「多摩川流域の地形と山崩れ」と題して論文を纏め修士課程を修了された。こうした成果が認められ、1959年4月からは当時法政大学に制度化された研究助手に採用され、他方博士課程の設立に伴って、1962年4月地理学科博士課程にも進まれ、1965年3月第一回生として博士課程を修了されるに至った。幾多の苦難もあったことかと考えられるが新制大学卒業後は、修士、博士課程ともに第一回生として終了し、1965年4月からは故秋岡武次郎教授の後任として文学部地理学科の専任講師に採用されるに至った。以後市瀬先生は地形研究とりわけ、山崩れ、地沁りを初め平野地形の形成研究に力を入れるとともに学生の研究指導に当たって来られた。

そして1968年4月には助教授に、1970年4月には教授に昇格し、来々3月、つまり1999年3月には、教授生活29年、1959年4月の研究助手からは40年の永きに亘って研究、教育に携わって来られたことになる。その労苦に対しては深甚なる敬意を表するとともに今後、益々健康であらんことを希望して筆を擱く。

## 若き日の市瀬先生

大矢 雅彦（早稲田大学名誉教授）

市瀬先生は法政大学の教授として、また山地崩壊、平野の地盤運動の専門家として、日本の地理学会における第一人者であることは云うまでもない。市瀬先生が存在はたんに法政大学の誇りであるだけでなく、市瀬先生と交誼をむすんだすべての人々の誇りでもある。この地理学の大家としての市瀬先生の育って行かれた過程を見ると決して甘いものではなく、若い時から大変な御努力の積み重ねの上に今日の市瀬先生があることがわかる。幸いにして若き時代、名指導教授多田文男先生の門下生として共に勉学する機会を持ったものの一人として、市瀬先生の若き時代の研究生活とその成果の一端を紹介させていただけることを嬉に思う。以下市瀬先生と呼ばずに市瀬さんと呼ばせていただく。

市瀬さんと親しく接する機会を持ったのは、昭和29年から資源科学研究所において研究を共にした時からである。今でこそ立派な建物が林立する東京で当時のことを正確に伝えるのはむずかしいが、新大久保の駅から10分ほどの所に建設省建築研究所、都立衛生研究所などとならんで資源科学研究所があった。戦時中からの古い2階建の建物であったが、その東南の一角に地理学研究室があり、浅井辰郎先生、市瀬さんと私が、また北側には三井嘉都夫先生の研究室があった。窓からは広々とした緑の敷地が望め、春には桜を楽しむこともできた。

当時はまだ独身であった市瀬さんは、建設省建築研究所の敷地内の建物で起居しておられたが、生活はおおよそ次のようなものであった。朝起きるとまず研究室へ来てひとしきり勉強をする。ついで朝食を取りに宿所にもどり、9時頃、丁度その頃私が出勤するが、その時より本格的に研究をする。昼はまた宿所にもどり、昼食後再び研究所で研究を開始する。午後4時頃私は帰宅してしまっていたので、あとのことはよくわからなかったが市瀬さんはそれから夕食まで研究をつづ

け、夕食後も研究所へ再び来て就寝近くまで勉強をつづけられたようである。市瀬さんが下駄をはいたままカタコトと研究所へ来ておられたことを思い出す。またお昼にはよく宿所でレコードを聞かせていただいた。

市瀬さんと資源科学研究所の調査として下北半島へ3回、そして大隅半島へも行った。最初の下北半島の調査は常念寺というお寺に全員合宿しての共同調査だった。一日2回しかないバスで尻屋崎へ行き、毎日4kmずつに西へ移動する海岸段丘の調査だった。当時の下北半島の北部は店一軒もなく、段丘面の草原には何百頭もの牛が放牧されていた。強風で帽子が吹きとばされ牛の大群の中へ取りにいったら、牛が全部こちらを見ていてゾッとしたことを思い出す。2回海岸段丘の調査をしたが3回目は海岸砂丘であった。市瀬さんの詳細な観察で砂丘を形成時代で1期より4期に分けることができたが、これは当時としてはユニークな研究であった。小屋一軒ない海岸で雷雨におそわれたり、ノミの大群のいるコンブ小屋へとまったり、私一人だったら到底できない調査を市瀬さんとの協力のおかげで完成、論文にまとめることができた。

最後に吉野川の調査についてふれておこう。この時は科学技術庁資源調査会の専門委員としての出張であったので、徳島県側の対応は丁重を極め、高級車一台ずつに一人ずつ乗っての調査であった。当時私はすでに資源科学研究所を離れ、建設省国土地理院へ勤めており、またソ連のグルジャでの国連の洪水防禦会議への出席の予定もあったので、余枝のつもりで吉野川の調査を行っていた。ところが市瀬さんはこの吉野川に心血をそそがれ、中央構造線にそって流れる吉野川の南岸（外帯）と北岸（内帯）の相違を地すべりを中心として明らかにされ、すぐれた論文にまとめられた。その後平野の地盤運動に研究対象を移されたが、この吉野川の崩壊は市瀬さんのそれまでやって来られた山地崩壊の研究の集大成であったと思う。

10年ほど前から私は縁あって建設省の依頼で再度吉野川流域で水害地形分類図を作製する機会

をもった。この時たえず参考にさせていただいたのはこの市瀬さんの研究であった。吉野川の左右両岸の比較についての研究は今後とも市瀬さんの研究の右にでるものはないと信ずる。

今回市瀬さんが法政大学御定年と聞く。定年後も研究は変わるものでなく、「永遠の青年」市瀬由自さんであってほしいと心から願うものである。

## 市瀬先生にお世話になったこと

伊藤 玄三（法政大学文学部）

市瀬由自先生には、法政大学文学部のメンバーに加えていただいて以来24年間おつき合いをさせていただいたことになる。先生は地理学科であり、私は史学科ではあったが、先生の御専門の自然地理と考古学的資料の関係でしばしば御質問をいただくことになり、この分野でも考古学に関心の強い先生がおられのかと、いささか緊張をさせられたところであった。特に、私のすまいが練馬に変わり、西武池袋線を利用することになってからは、先生と折折電車で一緒にすることがあり、よく大学のことで、研究のことでお話をうかがう機会があった。時に吊り革につかまり、時に座席に並んでお話をうかがったのが20余年になるとは、思ってもせぬ時間の早さである。

そういう折にお教えいただいたことの一つに、先生の御専門の地形変動のお話があった。お話によると、山形県の酒田平野では日本海側に若干の傾斜沈降があるとの事であり、地層堆積の微妙な変化などに関連して古代遺跡も注目されるということであった。海進海退の問題ぐらいいか考えていなかった私にとっては、一度調査に赴いたことのあった酒田平野にそのような自然条件があるとは、新鮮な驚きであった。遺跡立地を把握する場合に、その地盤もまた不動のものでは無かったことに気づかされたのである。

先生は、具体的な地層中からの考古学的資料の採集もされ、そのような折の縄文土器の年代についての意見を求められたこともあり、また学生をしてたづねられたこともあった。先生のゼミの学生中には、地形と遺跡を課題とする者もあり、良

い先史地理の論文を書いている学生がおった。先生が幅広く学生の指導をされていることがうかがえたところである。

先生は、実は、私達の「法政考古学会」の会員になっていただいていた。年会費をわざわざ研究室まで御持参いただいたりして、大変恐縮した次第である。何よりも、私達の小学会に理解を示していただいたことはうれしい限りであった。この会の「法政考古学」第20集記念論文集には、先生の玉稿「弘前平野の地形環境と古代遺跡」（1993年）をお寄せいただき、とかく見過ごしている地形学的視点からの御教示をいただいた。いま思えば、もっともっと自然地理からの視点をお教えいただければよかったのに、と考えさせられている。先生は、かなり度の強いメガネを愛用されていることはお見受けしていたが、幾年か前に目の手当てをされたとうかがっている。近年では、目に関するお話をうかがうこともなくなっていたので、完治されたのであろう。これからも、御退職になられても御元気で活躍され、変わらず御教示下さいますようお願い致したいと希望している。

## 市瀬由自先生との出会い

### —50年前のフィールドワーク—

長野 覺（元 駒澤大学教授）

1948年11月14日（日）、多田文男教授の御指導による1泊2日の野外巡検（久能山・登呂遺跡・御前崎）が実施されました。私は午前5時50分に東京都世田谷区若林町の、現法政大学文学部黒川欣映教授宅から東京駅に向かった。当時の私は駒澤大学高等師範部地歴科（地理学専攻）の2学年で、黒川家に下宿していました（欣映さんは東京高師付属高校生）。7時20分に東京駅から東海道本線で正午過ぎに清水駅着。5時間を要しているから普通列車で行ったようです。まだ第2次世界大戦の敗戦3年目でしたから、都内には戦災の焼跡が残っていたり、食糧難・交通難の時代で、野外巡検は日帰りか1泊2日程度でした。

清水駅に集合した12名の駒澤大学地理学2年生に、多田先生から、法政大学地理学1年生の市瀬由自さんが紹介されました。初々しい坊ちゃん

顔の市瀬さんとのこれが出会でした。現在は各大学間の単位互換や学生間の交流も活発ですが、当時は日本全体が貧困で、三度の食事ままならない状態でしたから、学生の行動範囲も狭く、大学に何となく固定されているような感じてした。そんな状況の中で、駒澤大学の野外巡検に法政大学から1年生でありながら単独参加されるとは、これはたいへんな勉強家であり、多田先生に見込まれた学生だろうと直感を覚えた50年前の記憶が蘇ってきます。案の定、その後の市瀬さんの御努力は、自然地理学(地形学)の調査研究、学会活動、学生の教育などに多大な業績をあげられ、母校の文学部地理学科と大学院地理学専攻の発展に貢献され、今年度で目出度く御定年を迎えられることに、深く敬意を表しますと共に、50年前の先生との出会いを懐かしんでおります。

なお私も1950年3月に駒澤大学を卒業すると、4月からは当時学制改革で旧制から新制大学に移行し、多くの優れた地理学者を擁した法政大学文学部地理学科の魅力にひかれ、また駒澤大学高師部地歴科卒業の先輩が多かった法政大学地理学科の3学年に編入させていただき、以後は兄貴のような三井嘉都夫先生(当時助手)、姉御のような大和裕子さん(当時は広川姓で4年生)、そして2年生の市瀬さんはじめ、多くの熱心な方々に刺激を受けながら卒業しました。その後私は故郷の福岡県で高校教員をつとめたのち、1978年から98年3月まで母校の駒澤大学文学部地理学科に就任させていただきましたが、1993年から駒澤大学定年退職までは、最終母校の法政大学地理学科で非常勤講師として「歴史地理学」を担当させていただいたことは大きな喜びでした。

省みますと、市瀬先生とは、50年前からの5年間はお互いに地理学を学ぶ学生として、また50年後までの5年間は法政大学教員として、直に先生とのご縁を重ねさせていただいた邂逅の人生は、50年前に東海道本線清水駅と、太平洋の波濤を眼前にした御前崎で、市瀬さんの未来像への直感が、間違いでなかったことを改めて認識し、感慨無量です。

どうぞこれからもご健康に留意して、これまで

蓄積された貴重な研究業績を基に、さらなるご指導とご活躍を期待しております。

## 調査の方法を学ぶ

飯田 貞夫(茨城キリスト教大学)

市瀬先生退職、ご苦労様です。私は、市瀬先生から地形調査の方法について色々と学びました。私が法政大学に入学してすぐに、資源科学研究所でアルバイトをしました。資源科学研究所は新宿の百人町にあり、三井、浅井、大矢の諸先生方が研究を行っていました。その当時は市瀬先生もお若く、毎年学会での発表、論文の執筆を行っていました。それらの研究の準備を私が行っていたのです。当時、大学の先生の準備のお手伝いができるなどと思っていませんでしたので、本当に感激しました。先生は、調査に行く前に必ず地形図に彩色します。特に等高線を彩色して、他の等高線と異なる場所があったら書き出して下さいと注意があり、色々と見つけました。たとえば等高線の凸状の背後に凹地が見られるのは地すべり地形であるなど。また、土地利用図を作成したり、空中写真から地形分類図を作成することを教えていただきました。これらの図が完成すると、資料の収集、前任者がどこまで研究しているかなどを調べ、問題点がどの部分にあるかなどを教えていただきました。

これらのことにより、研究者は調査に行く前に自分の研究する場所の問題点や、研究目的を知ることが学びました。現地調査では、デスクワークで行った問題点や、目的に従って調査を行います。が、小さな地形の変化についても注意する必要性を学びました。たとえば、静岡県防犯課の依頼により地すべりの調査に一緒に行きました。お茶畑の生垣が不自然に曲がっている、立木が根元から曲がっている、全体的に凸状に土地が出ている、凸状の背後に湿地や池があるなど、小さな地形の変化について教えを受けました。私は色々な面で雑な人間だったので、これらのことについても大変勉強になりました。現在、大学で研究・教育に携わるものとして、私は先生と一緒に学べた

ことを有り難く思っています。退職なさった後も、お元気に活躍して下さい。また一緒に先生と研究したいと思っています。今後ともご指導をお願いいたします。

## 市瀬由自先生のご退職に寄せて

東郷 正美（法政大学社会学部）

薄茶のシャツに幅広いネクタイ姿のちょっとお洒落な市瀬先生が講義ノートを小脇にして、強い陽射しの中、大学院棟と55年館の間から新館に向かって来られるシーンが、なぜか鮮明に思い出される。大学2年の初夏のことだったと思う。先生にはこの年の4月から、“地理実習”を教わっていたので、これは初対面でなかったはずだが、私の記憶には、これが先生との初めての出会いのように刻まれている。ともかくもあの頃以来、先生も私も、法政大学を離れることなく今日に至っているので、改めて考えると、34年も永きにわたり、ずうっとお近くにいらして頂いてきたことになる。

学生時代、先生には、上記の地理実習のほかに、銚子や伊那谷に“巡検”で連れて行って頂き、また、“生物・土壌地理”を教わった。法政の大学院に進学して地形研究の道を選ぶこととなった私にとっては、その入り口で出迎え、基礎を授けていただいた恩ある先生の一人である。しかし、大学院時代においては、多田文男先生が駒沢大学に移られた直後の地形学の指導教員不在の時期に遭遇し、次の法政地形学を担う市瀬先生は未だ大学院を担当しておられなかったため、先生に私の指導教授をお願いすることができなかった。その後、大学院で変動地形研究に取り組み、昭和48年に法政大学に就職した後はそれを土台にして活断層研究へと足を踏み入れ、結果的に先生と極めて近い研究分野に身を置くこととなったが、所属学部が異なり、研究グループ・研究スタイルの違いもあって、残念ながら先生と一緒に調査研究するチャンスは訪れることなく、今日に至ってしまった。

先生は、1960年代の終わり頃、それまでのどち

らかといえば気候地形学あるいは応用地形学的研究から沖積平野の地殻変動に関する研究へと力点を移された。そして、福井平野を手始めに、以降、庄内平野、西条平野、津軽平野、オホーツク海に面する常呂平野などを次々ととり上げ、地形図とボーリング資料、水準点改測資料を用いて、独特の切り口で沖積平野の微妙な変位・変形問題を論じられてきた。福井地震発生50周年にあたる今年10月の下旬に、福井市で日本地震学会が開催され、私は仲間と共に、金沢平野と福井平野の東縁を限る活断層の詳細位置と最近の活動性に関する研究の成果を報告した。これらは、完新世の活動特性を沖積低地の微地形分析を通して明らかにしたもので、その目の付け所は市瀬先生のそれに共通するものがある。先生が変動地形研究では最初に取り組まれた“福井平野”を、図らずも先生がご退職になる年に巡りながら、親しくご指導頂けるはずの数多くの機会を術なく逸してきたことの重大さを改めて感じ、悔やむこととなった。停年でお会いする機会は減ろうとも、引き続きご指導賜りたいと願うものである。

物静かで何事にも丁寧に対応して下さる真面目一筋の先生に、良からぬ期待をもってお酒など勧めたこともあったが、ついぞ羽目を外されることはなかった。ご退職後もそのような“ちょっかい”に乗ることなく、健康にますます留意され、楽しく充実した後半生をお送り頂けますようお願いしております。

## 市瀬先生、本当にお世話になりました

山口不二雄（地理学教室）

市瀬先生、本当にお世話になりました。およそ20年以上前、生意気ばかりで法政大学の教員になってから、歳月もたち、僕の髪の毛もすっかり薄くなりましたけれど、先生はずっと変わらないお姿で、いつもにこやかに微笑んでおられました。地理学教室の先輩教員として、一番長くおつきあいいただいたわけで、ご迷惑かけたことも少なくなかったと自覚はしているのですが、先生の笑顔と暖かな雰囲気についつい甘えてしまい、お

わびもお礼もいわずじまいで、本当に本当に申し訳ありません。

教員どうしのおつきあいは意外と難しく、例えば、他の教員が主催する「現地研究」について行きたくても、「船頭二人」になりかねない心配もあって、遠慮すべきなのが常識なのでしょうが、先生に甘えて甲府の現地研究にご一緒させていだいたこともありました。思い出すと、いつも勝手放題の行動をしてしまって、きっと学生さんにもしめしがつかず、お困りになったのではと今でも赤面してしまいます。まず遅刻の途中合流、それも上諏訪の知る人ぞ知る野生キノコの「いちのせ青果」で、「本当のホンシメジ」を大きなトロ箱で買い込んでのご機嫌な合流だったり、「オオムラサキの里」で捕虫網をふりまわすのに夢中で、先生のご説明も聞かずじまいだったり、僕が先生のお立場だったとしたら、即刻「レッドカード」退場の振る舞いの数々、本当に本当に懺悔の至りです。

しかし、あえて言い訳させていただければ、先生があまりにおやさしかったからこそ、甘えてしまったのであり、市瀬先生の「現地研究」以外には「参上」していないのだから、きわめて貴重な振る舞いのご勘弁いただきたい。それに、僕は北海道以外は長野県しか愛せない偏執狂であって、先生の世界と僕の世界が結構重なってしまうのが一番いけない。伊那も諏訪も富士見も僕の卒業論文のフィールド、鳳凰三山や北岳あたりは庭同然、櫛形山は学生時代に所属した生物学会の調査地域なのですから、「甲府現地研究」に「遊びに行かないのが不思議なくらい」(スミマセン、スミマセン)。それに先生も、野生キノコはお嫌いではないはず(信州人だもんね)。それにそれに、先生は足が早く、せっかくオオムラサキのいそうなよいクヌギの木があってもさっさと先に行ってしまうんだもんで、追い付いたときには説明が終わってしまっているんだべさ。

冗談はさておき、長いおつきあいの過程でしばしば感じたのは、笑顔の背後にある先生の強い意志力でした・両目の白内障を再度の手術で立派に克服されましたし、学問的にはきわめてオーソ

ドックスな方法を継承・堅持された印象があります。ご自分の立場をはっきりお持ちだった心の余裕からか、むしろ周囲に対してはリベラルで、様々な異質な考えや個性を柔軟に許容される一面もおありでした。それが、教室運営でもよい判断をもたらすこともあまたありましたし、先生の教え子たちがそれぞれに个性的で、各界でその個性と独創性を生かした活躍をできているのも、先生の暖かい庇護があつてのことと思うのですが、間違いでしょうか。生意気ですみません。本当に、ありがとうございました。

## 意思強固の手本

佐藤典人(地理学教室)

申すまでもなく、日本では四季の移り変わりが割合に明瞭である。寒い冬の後には暑い夏がやってくる。年々、その寒暖の度合いにはいささかの差こそあれ、どちらか一方の状況のみが持続することはない。確実に寒暖は繰り返しながら去来する。

また、この瞬時にもきっと地球上のどこかで食糧事情の悪さが深刻化し、飢餓に見舞われている地域もあるだろうし、人間同士の醜い争いやエゴイズムで悲惨な日々の生活を強いられている場所もあるだろう。

しかし、そんな中で『時』だけはどこでも同じように、公平に過ぎ去っていく。したがって特定の場所で一日の長さが長かったり、あるいはまた、ある地方のみで一年のそれが短かったりはしない。個々の人間の誕生以来の『時』の経過にもそれは適合できる。

このたび市瀬由自先生は70歳になられ、法政大学を退職することになった。法政大学の教員の定年は65歳である。けれども、本人の意志、ならびに所定の手続きを経ることにより、一年更新で最大70歳までの延長を法政大学は同時に認めている。ゆえに本年度でもって、市瀬先生はこの『70歳』に達したわけである。正に『光陰矢の如し』を痛感する。

人間、何よりも健康なうちに定年一杯まで勤め

あげ、かつ惜しまれる中で教壇を去ることは教師冥利につき、誠に持って喜ばしい限りで、おめでたいことと小生は思う。ただ小生の記憶によれば、市瀬先生はかつて眼の大病を患ったことがある。その病から快復後、市瀬先生はご自分の健康にそれ以前にも増して細心の注意を払っているように、端から見ている小生には映った。例えば、見るかぎりではアルコールを口にせず、お茶とて飲む時間帯を決めているようである。まして食事の内容ならなおのこと？簡単そうだが余程の意志強固でないとなかなか真似の出来ない行為であるし、ご家族の協力も見逃してはならない。まさに一病息災の手本のような方を傍らから長年、拝見してきたわけである。

その先生とも来たる新年度から同じ地理学教室の教員としてはお会いできなくなる。その点では大変に寂しいことではあるけれど、あの淡々と、ある面では達観したような独特の講義の進め方は永遠に小生の脳裏からは離れないであろう。加えてあの個性的な板書や「あのー」を間投詞的に挟む名調子のお話もいつまでも懐かしく思うことであろう。

先生、長い間、ご苦労様でした。どうぞ今までも増して健康に留意して下さいませ。

## 市瀬先生ありがとう

竹内 英二（拓殖大第一高校）

市瀬先生に仲人をお願いしたのは、今から20年前、先生が今の私の年齢で、79年3月のことでした。私にとって、その前後の数年間が人生で一番輝いていたように思え、その思い出と先生とが常に同じ世界にあったことを嬉しく思います。また、私も今から20年後、今の先生のように元気で活躍出来ることを願っています。

思い起こせば、71年の3月、ほとんど諦めかけていた大学生活を法政大学が叶えてくれました。浪人時代から抱いていた地理学の憧れから、地理研入部は必然でした。入部早々、同級生を勧誘するほど舞い上がっていた。クラブでの活動は刺激的で、サークル活動そのものが楽しくて仕方があ

りませんでした。大学生活の大半は地理研と共にあり、疑問を持つことはありませんでした。そのおかげか、多くの学友と共に、生涯の伴侶にも出会いました。また、研究会で地形学を学び、先輩から市瀬先生を紹介していただくことが出来ました。

先生の地形学の講義は刺激的であり、学問としての厳格さを学ぶことが出来ました。なかでも、「地形ゼミ」での経験は貴重でした。そこでは、夏休みに実施される「諏訪・伊那谷」現地研究を目標に、学生が自主運営していくスタイルでした。初めて、主体的に論文発表やディスカッションをすることが出来、大学生を実感させられました。先生は、学生を全面的に信頼し、決して押さえつけるような指導はされませんでした。私のようなタイプの学生にとっては有り難かったのです。卒論はゼミで学んだ、河岸段丘とその変動を扱いました。論文を作成する中で、学問の厳しさと同時に憧れが沸き上がり、大学院への進学を決意しました。

大学院時代は「二足の草鞋」でした。地学の専任として高校教育にも携わりながら、大学院生活を過ごしました。その中で、「地形ゼミ」はさすがに大学院のゼミだと思いました。仲間の研究を、そのまとめ方も含めて論文作成の過程で議論できることは素晴らしいことでした。その都度、仲間や先生からのアドバイスには感心し、その雰囲気酔っていた時代でした。しかし、自分の修論は遅々として進みませんでした。ゼミ仲間の全面的協力によって、やっとの思いで提出しました。その際、相手の親から結婚の許可が得られたとの報告をし、仲人の依頼をした時は嬉しさで一杯でした。

結婚式は会員制で質素でしたが、多くの仲間や先生方に参加してもらい、幸福の絶頂でした。先生のいつもと変わらぬ淡々とした紹介は、私達に深い愛情と期待が込められ、思わず目頭が熱くなりました。その後、学会での発表が好評であったと報告した時や、長男が産まれた時に、わがことのように喜んで下さったことが今でも忘れられません。学問の師であるばかりか、人生の師でも

あったことに感謝申し上げます。いつまでもお元気で、地形学の発展に携わって下さい。

## 市瀬先生、ご苦労様でした

長崎 正（都立市ヶ谷商業高校）

市瀬先生は、本当の地理学者です。つねに、フィールドワークを大切にされる先生です。学部  
の現地研究の時は、いつも学生・院生の先頭に立ち、フィールドを歩いていました。とにかく、多くの学生が先生の歩くスピードに追いつけないのです。歩くというより「競歩」の選手のようなのでした。そして、一つでも多くの「露頭」を観察しようとしたのです。日が暮れそうになってでもです。私が市瀬先生の現地研究に参加したときは、まだ「中央高速自動車道」が工事中でした。伊那谷に多くの「露頭」が出現していました。今では考えられないくらいに、ローム層と、れき層が見事に見えました。その時も、先生は「露頭」に吸い寄せられるように、その場所に近づいていきました。そして、多くの学生を前にその説明を詳細にされたことを、今でもはっきりと覚えています。そして、飯島にある先生行きつけの旅館の「馬刺」の味も忘れられません。

卒業論文に、修士論文と、大変お世話になりました。つねに、細かくチェックされたことを覚えています。あの几帳面さで、チェックされましたので、私なりに満足のいく論文になりました。今となっては青春の思い出であります。そう、先生のチェックの「字」には特徴がありましたね。今でも忘れませんよ。私は、合計23年間もお世話になったことになります。真面目で、実直な先生に頼まれると断ることが出来ませんでした。ですから、このような長い長いお付き合いになってしまったのでしょう。

私たちの学部時代には、有名な地理学者の先生がたくさんおられました。多田文男先生に、岡山俊雄先生に、渡辺光先生など、そして、まだお若かった三井嘉都夫先生に、鴨沢巖先生に、吉野正敏先生に、そして、市瀬由自先生などがおられましたね。しかし、多くの先生がご退職され、最後

に残った市瀬先生もご退職されるとなると、何か寂しいかぎりです。フィールドを愛した多くの先生たちがご退職される現実を目の当たりし、時の流れを感じます。もうすぐ21世紀ですね。これからも、ご健康に留意され、フィールドを歩いて下さい。市瀬先生、本当に、本当に、ご苦労様でした。

「いいですねえ 続けて下さい」  
の意味はコレだ

長谷川 均（国士舘大学）

すこし前のことだが、多田文男先生の肖像写真ににらまれながら話をしたことがあった。その時、つい法政のことを思い出してしまった。多田先生は、七十歳の頃、なんだかもうヨタヨタして、講義の後によろめいたりしておられ、その後すぐに亡くなってしまわれたけれど、同じ歳の市瀬先生はずいぶんお元気だ。もっともぼくはもう何年もお会いしていないけれど、今回の話があって「ところでお元気か」などと聞くと、「ずいぶん元気だ」という話が伝わってくるので、そうなのだろう。

多田先生の話が出たついでにもうひとつ。多田先生はたいした先生だったみたいな言い方を、特に法政など門下生の多いところでは聞けけれど、ぼくみたいに、ずいぶん歳の離れた当時の若者からみると、ふだんは嫌みや皮肉ばかり云う老人にみえた。それは、きみが真の多田先生をご存じないからだなどと云われることがあるが、ぼくにとっての真の先生はそういう人だったのだからしょうがない。もっとも多田先生は、法政の学生の前では嫌みや皮肉を聞いてほしかったのかもしれない。

さて、市瀬先生である。先生はぼくが学生の頃から本当にかわっておられないと思う。二十五年前の先生は、ちょうど今のぼくらくらいの年齢だったのかと思うと、何か切ない気もするけれど、いつもうらびれた感じの服装で、風呂敷と青い折りたたみ袋をぶら下げておられた。貧乏学者という風情で、田舎から出てきた純真なぼくなどは、学究者というのはこういうものかと妙に感心したも

のであった。まあ、その頃の先生は、飄々としておられ、いわゆる若いのに枯れた感じなのだ。「かわゆい」などと先生のことを云う女学生もいたが、何を見てんだこいつらはなどと思ったものだった。

ぼくなどに対しては、何を相談しに行っても「いいですねえ、続けて下さい」というばかりだから、そんなもので良いのかという気になり、外へ出ては恥をかくという繰り返しであった。いま思うに、これが市瀬流の鍛え方であったのかもしれない。いい気になって他流試合をしない井の中の蛙なら、それはそれでよし、外へ出て恥をかけば少しは勉強する気にもなるだろうという、これが市瀬流の教育なのだと、ぼくは今、先生の悪口を書くつもりで書き進んで、ここまできて初めて気が付いた。

人生日々是勉強であるということを、今日もまた悟ったわけだ。もっともぼくは、恥とひんしゅくをかうことに慣れすぎて、自分の学生には「恥とひんしゅくだけは金を出してでもかえ」などと、酔っぱらって訳の分からないことを云っているけどね。これは市瀬流教育とは関係ないか？……。

## 伊那谷現地研究「陣屋」

米澤 宏（独教学園高校）

今からちょうど20年前の1978年の夏、伊那で行なわれた市瀬先生の現地研究に参加しました。この現地研究では、諏訪盆地から伊那谷にかけて断層地形・段丘地形・テフラなどを観察しました。宿舎は「陣屋」という宿でした。

現在、私は、私立学校で水泳部の顧問をしています。ある年、水泳部の部長が、夏休みの合宿の宿舎を探してきました（当時の合宿は、部長が合宿先を探し、千葉県館山、伊豆半島河津、長野県野沢温泉と、ここぞという場所がなかなか見つからなかったので毎年、場所を変えていました）。この時は、長野県飯島町の与田切川の河岸に町営の50mプールがあって、8月の最終週だと、地元和学校も2学期が始まっていて、すいているの

で、何コースか借りられるということでした。宿の名は「陣屋」というのだという話でした。その時は、いい合宿場所が見つかったみたいでよかったと思いました。しばらくして、合宿の案内などを作るうちに、「陣屋」という名前はどこかで聞いたことあるな、場所も伊那谷だし、もしかしたら、と思うようになりました。

そして、合宿の日。合宿所の「陣屋」は、やはり市瀬先生の現地研究で泊まった「陣屋」でした。現地研究で泊まった頃とあまり変わっていませんでした。早速「陣屋」のご主人に市瀬先生の現地研究で以前お世話になった旨をお話し、市瀬先生のことや大学のことをお話ししました。こんなことがきっかけとなって、すぐに親しくお付き合いさせていただくことになり、この年以降は、ずっと飯島町の「陣屋」を使って合宿を行なうようになりました。

現在、私たち顧問が泊まっている部屋（生徒の部屋は変わっても、顧問の部屋は毎年決まっています。）は、宿の2階にあり、市瀬先生がお泊りになられた部屋ではないかと思います。この部屋に入ると、もうすぐ夏休みが終わるんだなあとしみじみすると同時に、「しっかりやっていますか」と市瀬先生が声をかけてくださっているような気がして、気が引き締まる思いがします。

さて、最近の飯島町は、駅前商店街の再開発が進んでいます。また、駒ヶ根市寄りにショッピングセンターが作られ、その中に温泉ホテルである「ホテル陣屋」がオープンするなど、2つのアルプスが見える町は大きく変わろうとしています。

## 一劣等生の思い出

山川 克己（法政大学文学部兼任講師）

学生・院生にはいろんなタイプがある。私がそうだったようにグータラな学生がいれば、誉められて自信がつき成長するタイプ、逆に叩かれてはじめて能力を発揮できるような学生もいる。同じように大学の指導者にもいろんなタイプがある。私が大学院にいた頃、某大学には厳しい指導で知られ、育てるより潰してしまう学生の数の方が多

いと言われた某助教授とか、弟子の結婚相手の選び方にさえ口を出したという時代錯誤の某教授などがいた。お二人とも学生性悪説の立場をとられていたのだろうが、私などが指導を受けていたら、とうの昔に潰されていたと思う。

さて、市瀬先生であるがこれら先生方の対極におられた。つまり学生性善説である。だから私のような出来の悪い学生でさえ一度たりとも叱られたことはない。博士課程の2年の時、院生の方際で結婚することになり仲人をお願いに行ったときも、さすがに叱られるのではと内心ヒヤヒヤしていたが、先生はこころよく引き受けてくださり、とてもありがたかった。声を荒げる、目くじらをとてる、などという言葉は先生には縁のないものであった。もっとも私自身は、そんなやさしい先生に甘え、テーマをこころろ変えて適当に研究を続け、壁にぶつかり自らの能力の限界を悟ったわけで、先生の性善説に報いることが出来なかったのが返す返すも残念である。

先生との一番の思い出は2回の調査旅行である。科研費研究のお手伝いとして北海道東部と高知の四万十川へ連れて行って頂いた。運転手兼雑用係であったが、今にして思えば、世間知らずで視野の狭い私に、少しは別の見方を教えてやろうという先生の優しいお心遣いだったのかもしれない。しかしノー天気な私には、旅費・宿泊費・ビール付きでいろんなところへ行けることがただただうれしかった。

その頃の私は免許を取って間もない頃で、運転はレンタカーで年に数回、という程度の腕前だったから、山あいの狭い林道のすれ違いや車庫入れはとても大変だった。あるとき、建物の前に車を入れようとしたが車止めもなく車間距離がよくわからないので、バックするときに先生に見て頂くことにした。

「先生、ぶつかりそうになったら教えて下さいよ、ぶつかってからじゃダメですよ。」

「ああ、ハイハイ、大丈夫だいじょうぶ」

すっかり信用した私はバックミラーを見ながら少しづつバックする。見た目よりうしろまで下がるものなんだな、と思った瞬間、ガリガリと車

体をこする音。わっと思ったがすでにあとの祭り。先生はどうも建物にぶつかるまでは大丈夫だと思われたらしいが、建物の前には花壇があって、車体の下部がそのブロックにぶつかってしまったのである。旅行の最中、「自動車は便利だねえ。私も免許をとろうと思うが、どう思うかね」とおっしゃった。市瀬先生がハンドルを握っている姿はなかなか想像できない。少なくとも私は助手席には乗りたくないな。「うーん、そのうちお嬢さんがとられるでしょうから、先生は必要ないんじゃないですか。助手席の方が楽ですよ、わははは」と答えた記憶がある。そのせいかどうか知らないが、その後、先生は免許をとられていない。でも先生、免許は取らなくて正解でしたよ。

どうぞ、これからもお元気で活躍ください。

## 70 歳という人生の新たな門出を祝して

春山 成子（早稲田大学）

市瀬自由先生、70 歳お目でとうございます。長く、法政大学で教鞭をとられ、多くの地理学者を育てられ、今、まさに、その学びやである法政大学を旅立とうとしておられる。大学というところは、いつも出会いの場であり、同じく、別れの場でもあり、多くの学生が先生のもとを訪れ、巣立っていったことと思います。私が、市瀬先生と市ヶ谷の法政大学の校舎で初めて出合ったのも、もう遙かかなたの 20 年も前のことになってしまいました。が、当時を振り返りますと、いつも堅実な歩みで、着実に研究を進められている姿があり、学生には常に暖かなまなざしで研究生生活を見守られている姿があり、さらに、穏やかで、それでいて毅然とした態度で学生の研究発表を批評し、励ましておられる姿があり、さまざまな姿が今脳裏に浮かんできます。

これからも、ますますお元気で研究生生活がつけられますように、心からお祈りしております。

## 市瀬由自先生の思い出

道明 紀彦（所沢東所沢中学校教諭）

1976年、私は法政大学に入学しました。将来、中学校の教職につきたいという夢をもち、目標にむかって頑張りたいと思ってました。そして、在学4年間で多くの先生方に学問の楽しさとその苦勞を教授していただきました。その中にあって市瀬先生には、ゼミナールや教職に関していつも適切なご指導とご鞭撻をいただき、今も感謝しています。

現在、手元に長野県諏訪・伊那現地研究“780708~12”のフィールドノートがあり、ページをめくると、夏も近い暑い日に学生の先頭に立って歩かれ、大きいお声で説明なされた姿が浮かび上がってきます。

諏訪盆地の断層地形スケッチや天竜川の河岸段丘の露頭図、木曾御嶽山の火山灰柱状図などには、きめ細かいご指導とやさしい語りかけを思い出します。そして、伊那飯島町の陣屋旅館では夜遅くまで盆地の地形学について講義と教授をしていただきました。

卒業論文では、高校時代から登山していた白馬岳を例として「高山にみられる微地形と形成作用」について考察することにしました。これをきっかけに、市瀬先生には卒業まで指導教官として個別にご指導いただきました。

特に、地形図や植生図、地質図などの表現や2年間にわたる高山帯での実験方法について未熟な部分には、丁寧なご指導と的確な助言をいただいてまとめることができました。

1980年に無事大学を終えて、念願かない、埼玉県所沢市立中学校に理科教師として赴任することができました。

さらに6年の月日が流れ、結婚して2校目の中学校に転勤したとき、新緑萌立つ5月の家庭訪問中にぱったりと先生にお会いすることができました。学生時代のつもる話もたくさんありましたが、そこそこにしてお別れしなくてはなりませんでした。

たまたま、転勤先中学校の通学区に先生の御自宅があり、もしやと思いつつも再会できたことがとてもうれしかったとともに、お世話になった先生の地元で中学校教育に携わることができたのも

何かの縁ではないかと強く感じました。

大学では授業と自己研究が一番大切でありそれを支えていただいたのは諸先生方だったと今も強く感じています。そして、地理学科の最大の特徴は、足で歩き、自分の目で観て実地で経験を積み、学問的により広く奥行の深い人間を育てているのだと思います。

市瀬先生はまさに、校歌の文字通り法政大学地理学科の“良き師”であり、そこに集う学生達にはいつも“良き友”とならんことを育ててくれたのだと強く感じます。そして先生の御退職を前に、私たちは多くの御教示に対して深く感謝いたします。

## 市瀬先生、スーパーマンに変身！

佐藤 照子（国立防災科学技術研究所）

市瀬先生の口から静かにしかし力強く、弾丸のように飛び出してくる専門用語。大学院入学後初めての先生の講義。聞き逃すまいと先生の言葉に神経を集中し、終わった時には脳味噌がスポンジになっていました。それから3年間の学生生活が始まりました。とりわけ楽しかったのが巡検です。烏打帽子にサングラス、ニッカズボンスタイルに登山靴、帆布の肩掛バックにハンマー、時には、通販で買ったという折畳みスコープという出で立ちの市瀬先生と歩いた巡検は、大学院、法政地理学会、有志主催等々合わせて5年間で12河川流域にも達しました：那珂川流域、久慈川流域、阿武隈川流域、釜無川流域、天竜川流域、富士川流域、小貝川流域、大和川流域、神田川流域、小櫃川流域、常願寺川流域、黒部川流域。洪水災害の調査研究を生業（なりわい）とする私にとって、巡検は河川流域の土地環境の学びの場でもありました。仕事から、河川、洪水流出、土地環境などとは深い関わりがあり自分なりに勉強をしてきました。そして、市瀬先生との巡検は、洪水が発生する場の土地環境について実際に目で見ながら、現地での地形の見方や地形を形作る様々の要素を学ぶ絶好の機会を与えて下さいました。谷中分水界や河川争奪の現場、赤色をするもろい腐り礫、

土石流が作った地形、扇状地、水中で堆積したローム、グライ土…。一つ一つが新鮮でした。巡検の時には、静かで温厚な（しかも60代後半の）市瀬先生がスーパーマンに変身し真っ先に急崖を駆け上り、真っ先に飛石を伝って川を渡り、真っ先にスコップで露頭を掘り、先生の子供か孫(?)のような学生は後からついていくというのが常でした。学問への強靱な意志と真摯な姿勢、地理への熱い情熱、学問の面白さを私たちに伝えたいという強い思いがスーパーマン市瀬先生から伝わってきました。

平成10年夏の法政大学地理学会主催常願寺川巡検の後、有志で黒部川扇状地を歩きました。この時市瀬先生もご一緒して下さいました。夜の打合わせで「The 市瀬ノート」が出てきたのには驚きました。私たち数人のために用意して下さいました黒部川扇状地についての講義、ホテルの一室の小さなテーブルを囲んで贅沢な時間を私たちは過ごしました。

これからも、門下生が集まり先生とご一緒に巡検する機会をもてたらいいなと思っております。そして、法政大学を退職され自由の立場となる市瀬先生が、経験と知恵がつまった「魔法の引き出し」から何を紡ぎだされるのかが非常に楽しみです。

市瀬先生、これからもますますお元気でご活躍下さい。

## 市瀬先生へ

吉岡 美紀

私は、地理学科の授業の中で「空中写真」の時間が大好きでした。この授業で初めて実体視を体験しました。実体鏡を通して、飛行中の航空機から地上を眺めるのに似た感覚が味わえるので、毎回ゾクゾクしながらレンズを覗いていました。それから、好きだった授業が市瀬先生担当の「地理学演習」でした。この授業は、五万分の一の地形図上で作業をしながら、その地図から読み取れることを学んでいくという方法で進められました。使用した地形図は「脇町」「高松南部」「米子」「北

小松」「妻籠」などでした。学生が地形図を広げている机の間を歩きながら、先生は全員に作業の指示をします。水系を青く目立たせたり、等高線100m毎に色を塗ったり、鞍部に印をつけたり。学生の作業中も先生は解説をしています。先生にとって地形図から読みとれることは次から次へいくらでもあって解説が続くので、学生は地図上の作業と解説のメモをとるのとで大忙しです。それでも、指示された作業を進めていくと、先生の解説した内容が地図上にはっきりあらわれてきて、感激しました。まるで地形図に隠されているパズルを見付けて解いているようでした。

大学院では市瀬先生に指導をしていただき、お世話になりました。市瀬ゼミの巡検にも数回参加しましたが、先生は野外ではいつも学生よりも元気に、まわりに興味を持って歩かれ、巡検終了まで「疲れたからここは簡単に」というようなことがなかったと思います。特に印象に残っているのは、ロームの露頭に行くとはンマーやスコップで、はしゃぐように斜面を掘る先生の姿です。伊那谷の与田切川沿いの立っているだけでも大変なほどの急斜面で、ご自分の掘ったローム土に足半分埋まりながら、数層のローム層を探す姿は、「研究ってこんなに楽しい」と言っているように思われました。

2, 3年前の夏休み近くのことだったと思いますが、市瀬先生のスケジュールを伺ったことがあります。私としては、もう授業も少ないはずだし先生の時間は割合自由なのではないかと予想してのことでした。先生は「いやあ、どうですかね」と予定を確かめていらっしゃいましたが、私の予想に反して、夏休みとは言っても通信教育の授業が入り、種々の会議予定があり、すぐに空時間を探すのが難しいほどお忙しかったのです。退職後は、授業や会議から解放され、存分にご自分の研究を続けていかれるのではと思います。市瀬先生お疲れ様でした。今後もご指導よろしく願います。

## 市瀬先生と巡検

小寺 浩二（地理学教室）

市瀬先生の思い出といえは、どうしても「巡検」をあげたくなる。多くの卒業生にとっても、まず最初に思い出される市瀬先生の姿は、露頭を削りながら夢中で説明をされる姿であり、眼鏡をとっかえひっかえしながら、地図と現地の様子を指さし説明される姿ではないだろうか。しかし、先生の教員生活最後の10年間、多くの巡検で助手として講師としてご一緒する機会を得た私にとっての先生との巡検は、少し趣を異にする思い出である。なにしろ、私が7年間の助手生活を終えて講師になるとき、最も残念だったのは、市瀬先生の巡検に助手としてついていくことができなくなることだったのである。

助手という立場だと、学部・大学院・通教、場合によってはゼミ合宿の巡検などにも参加することになり、年に3～5回、なんと私は助手時代に20回以上先生の巡検にお供したことになる。最も頻度が高かったのは、伊那そして甲府だが、その他にも会津、駿河湾、房総、那珂川・久慈川、琵琶湖、秩父などなど、思い出深い巡検ばかりだ。当然、先生の豊富な知識と詳しい資料による解説から学んだことは数知れないが、助手としての技量というか、ツアーコンダクターの能力（実はこれが地理屋には割と重要）のようなものを、十分に鍛えていただいた。くだけた言い方をすれば、世話のやける、手間のかかる先生だったのである。といっても、あれをやれこれをやれというのではなく、助手がTPOをわきまえて臨機応変に経ち振る舞わなければうまくいかないのが、市瀬先生の巡検であった。「曲がれます」と言われて大型バスを誘導すると、前進も後退もできなくなって立ち往生したり、「通り抜けられるはずですよ」とのことなので、細い一本道に入っていくとバスの屋根がつかえて進めず延々バックで戻ったり。バスの中の説明でも、先生の口からマイクが離れないよう度々注意したり、先生が「右手に見えるのが」とおっしゃるのを「左手ですね」と言いかえ

たり（先生は、ご自身の位置から説明されるので、左手の窓に向かっておられるときは、バスの左手前方のものを、「右手」と言われることが多い。・・・実は、私も現在巡検の説明中にそう言っていることがある。）、助手はなかなか気を抜くことができない。しかし、これも考えようによっては、「しっかり下見をしておくように。説明中は常に集中しておくように。」ということで、先生の巡検によって鍛えられた私は、助手時代の後半には、実に要領よく巡検の運営ができるようになり、説明内容も深く理解できるようになったような気がする。

とにかく、市瀬先生と言えは、少々大変だったことも含めて微笑ましい巡検のシーンが次々と思い出され、「巡検」が「地理学」が大好きで、我々のそういう気持ちも大きく育てて下さった方である。退職されても、是非、法政大学地理学会やその他の機会を利用して巡検を行っていただき、2年ほど前から申し上げている「市瀬巡検」をまとめた書物を世に出す計画を実現させていただきたいと願っている。

とりあえずは、長い間お疲れさまでした。

## 市瀬先生の講義ノート

小島 弥生（旧姓：小泉）

—「このような地形が地図上にありますか、ないですか、よく探してみてください。」

—「これをA層といい、その・・・。」

市瀬先生の御講義というと、数々の名言を御記憶の方も多いと思います。では、その時先生がいつも手元に置かれていた講義ノート、皆さん覚えていらっしゃいますか？私が先生の授業を思い出す時、一番印象的なのがあの、ノートなのです。

先生の講義、特に『生物・土壌地理学』の難易度は学生の間でも有名でした。例のノートをチラチラッと見ながら話される、そのスピードについていくには、かなりの熟練を要します。矢継ぎ早に紡ぎだされる専門用語。黒板の至るところに書かれては消され、消されては書かれる文字。ノートをとろうと下を向き、目を戻すと、次の説

明が黒板のどこに書かれたのか見失います。ただ写すだけでは理解できません。授業が終わってみると、「自分でとったノートなのに、ちんぷんかんぷん???」なんてこともありました。試験前に、「ああ、あのノートをちらっとでも見れたらなあ。」という声が、よく囁かれていたものです。

また、ある日、ゼミで先生がおっしゃいました。「いやあ、小泉さんがいるからねえ。今年は〇〇の話をししよう。」

先生は学生に同じことを聞かせないように、講義内容を選んでくださいました。ノートもそれに合わせて、差し替えて使われていたのです。外見は何年経っても変わらぬように見えます。A5サイズで、そんなに大きくもぶ厚くもないのです。でも、先生はこれ1冊ですべての講義を賄っていらっしゃいます。となると、ノート全部の厚さは、いったいどれだけあるのでしょうか。どうやってあの小さな頁にあれだけの情報を収めているのでしょうか。考えれば考えるほど、気になります。「ああ、あのノートをちらっとでも見れたらなあ。……！」

「もしもし、市瀬先生ですか。大変恐縮なのですが、一つお願いが…。」

いつも穏やかに笑っていらっしゃる先生。私の不躰な好奇心にも、御覧のように快く応えてくださいました。どんな質問をしても、「あっ、あそこですか。あそこはですね…」と、即座に答えてくださるのには、まったく敬服いたしますが、先生の頭の中の膨大なデータベースの一端を垣間見た思いです。その知識を先生はいつも、余す所なく私達学生に伝えようとなさっていました。このノートを見るにつけ、学問に対しても教え子に対しても、常に真摯であられた先生の御志を思い出さずにいられません。先生に師事することができ、本当に嬉しく思います。

その膨大な知識を帽子に収め、岩石ハンマーを鞆にぶら下げて、実に嬉しそうに現地を歩く、そんな先生とまた巡検に御一緒したいな、と願う今日この頃です。どうか先生、いつまでも御元気で。

## 市瀬先生とビールジョッキ

塩谷 恭正（山川事務所）

市瀬先生はお酒を飲まないという話は、諸先輩方はご存じのことと思います。ただし、私が大学院在学中の新入生歓迎会などの席では、グラスに注がれたビールを多少口にされるようになり、その程度でも、そのことをOBの方に話すと驚かれたものでした。しかし、最近の先生はその比ではないようです。

今年の10月、法政地理常任委員会の会合に出席された方々を含めて、先生と一緒に食事（実際は飲み会）をすることになりました。店に入り、最初に飲み物を注文する際、私たちは先生にソフトドリンクを勧めたのですが、先生は「ぼくもビールで結構です。」とおっしゃって、しかも他の人に合わせて中ジョッキ（500mlぐらいでしょうか）を頼まれたのです。市瀬先生はアルコールを全然口にしないといった話は、この時点で完全に過去のものとなってしまいました。

この席では話が盛り上がり、私は酔っていたため多少記憶が定かではありませんが、この時の話をいくつか紹介すると、まず、午後3時を過ぎたら先生は緑茶やウーロン茶を飲まないよう気をつけていらっしゃるそうです。その理由を尋ねてみると、それらを口にすると夜お休みになることができないとのこと。仮に夜9時頃に床に就かれるとすると、その6時間前から食事の管理をされていることになります。そこまでご自身の健康、生活習慣に気を使われているとは驚きです。また、これは先生が少年の頃のお話で、蜂の子（以前テレビで見たが、土の中に巣をつくるクロスズメバチのことらしい）をとるために巣へ戻る蜂を追いかけるのですが、飛んでいる蜂を見失わないように空を見上げていて田圃の中へ落ちたことがあるそうです。「伊那」の野原を走る市瀬少年の姿が目には浮かぶようですね。そして、そのうち酔いのまわったOBの一人が、先生の頭について触れ、周囲は一瞬息をのんだのですが、先生は機嫌を悪くされることもなく、目の病にかかってから老化現

象が進んだと淡々と話され、その寛大なお人柄に改めて感銘を受けました。

話がはずみ、ふと先生のジョッキに目をやると、すでに2/3以上は空いており（後日聞いた話だとすでにもう一杯おかわりをしていたらしい）、「先生、そんなに飲めるんですか？」と尋ねると、「学部生の子とか〇〇君とかと一緒にこういう店に何度か来るとね、飲めるようになるんですよ。」とのこと。話は、一人は周囲の人々によって変わる一と環境決定論に結びついてしまいました。

これほどまでに先生がお酒を飲まれたのを、私は見たことも聞いたこともありません。ともかく、これまでの先生のイメージは一瞬のうちに崩れ、新しいイメージが着々と築かれるのをその時に感じました。さて、アルコール制覇の次に、先生は私たちにもまた新たな一面を見せて下さるのでしょうか。私はひそかに「朝帰り」を期待していますが…。

## 現地研究の思い出

吉野 徳康（地理学教室助手）

岩石ハンマーを片手に露頭をすたすた登り、熱く地形を語る。現場に出ると、普段静かで温厚な市瀬先生からは想像のつかないもう一人の市瀬先生が現れる。これが現地研究での私の印象です。私が助手になってからの3年間、何度か現地研究で市瀬先生といっしょになる機会がありました。市瀬先生のすごさは、歩く地理学用語辞典と言われるほどの博学に始まり、現場での行動の速さ、露頭を掘るパワーのすごさ、景観を分析する視点のするどさなどにあり、だれもが驚いてしまいます。市瀬先生の知識を少しでも自分のものにしようと、私と学生らはがんばるのですが、市瀬先生についてゆくのがやっとでした。

ある現地研究では、『こんなやぶの中に入るのか。』と思った時には、既にやぶの中に入っていましたし、『こんな急な露頭を登るのか。』と思った時には、もう、岩石ハンマーを杖がわりにして登り始めていました。そのような市瀬先生のお姿を見ると、どこからこんなパワーが出るのかいつも

不思議でした。また、露頭のテフラを指で摘むと、すぐさま構成物質を判別し、このテフラが何であるかを教えて下さいました。『先生の手は、きっと魔法の手にちがいない。先生のめがねは、きっと魔法のめがねにちがいない。』などと、私はいつも思っていました。

市瀬先生の18番と言われる伊那盆地の現地研究は、これまで多くの方が参加し、数々のドラマがありました。宿は20数年間、あの陣屋です。名前とは裏腹の宿の内容に、以前より誰もがまいいていました。しかし、どんなに寝床が良くなくても、食事が冷えきっていても、市瀬先生が文句を言うことはありませんでした。このような市瀬先生の精神的な強さと礼儀正しさに、私はわがままに育ってきたことを反省させられました。1997年3月に大学院の現地研究で陣屋に泊まった時は、部屋に暖房がなかったため、市瀬先生と私は、二人のふとんの間に電気を入れたこたつを置いて寝ました。今ではとてもなつかしい思い出です。最後となった伊那盆地の現地研究（1997年9月）は、宿を温泉付きのホテルに変え、ゆっくり休んでもらうことにしました。市瀬先生は、ホテルの温泉と部屋と食事にとっても満足して下さったので、私も内心ほっとしました。

この現地研究のエピソードとして、千人塚の露頭でなかなかPm1（御岳第1テフラ）が見つからず、市瀬先生が夢中で岩石ハンマーで掘るあまり、先生の下にいた学生が泥をかぶってしまったことがありました。また、念通寺断層の手前の川が増水してしまい、みんなで石を運んで橋を作ったこともありました。なかでも、一番のエピソードは、市瀬先生がバスの運転手に道を誘導した時でした。

吉野：「そろそろ前方にT字路が見えてきましたが、そこを右に曲がれば良いのでしょうか。」  
市瀬先生：「あっ、そうですね。その水準点を北東に曲がって下さい。」

## 市瀬先生の講義の思い出

中山 大地（千葉大学環境リモートセンシングセンター）

1988年に地理学科に入学して、一年生の頃はほとんど専門の授業はなかったが、二年生になってからは専門の授業が増え、ようやく地理学科に入学したという実感ができた。実のことを言うと、一年生の頃は地理学科の先生にお会いする機会はほとんどなく、専門科目一科目（三井先生）と、一般教養科目で一科目（渡辺先生）でお会いする他には、地理学科の他の先生をほとんど知らなかったのである。そんな中で、二年生になって市瀬先生の生物土壤地理学を受講したとき、これは大変な授業をとってしまったと正直思った。

市瀬先生の講義を受けられた方は分かっていると思うが、先生の講義の密度たるやすさまじいものがある。メガネをとっかえひっかえ講義をなさるのだが、先生のあの脳味噌の中にはいったい何が詰まっているのだろうと不思議に思うほどである。授業自体は淡々と進められるのだが、その情報量はすごいものがある。ほとんど一時間半の間喋りっぱなしである。さらに、先生は板書などといった学生にとって楽なことはほとんどなされない。あの講義ノートと頭脳の中から、膨大な量の知識が惜し気もなく、淀みもなく披露される。たまに重要なキーワードを黒板にかかれるのだが、さっきは黒板の左端、その次は右端、今は真ん中と、あちこちに書かれるのだ。そういうわけで、一瞬でも授業から気をそらしてしまうと、先生がどこに何を書かれたのか分からなくなってしまう。黒板の上を探しているうちにも授業は進み、先生のおっしゃられたことを聞き逃してしまう。そうこうしているうちに授業から取り残され、結局よく分からないということになりかねないのだ。さらに、先生は授業の始まりのときに「先週はどこまで進みましたっけ？ちょっとノートを見せてください」とおっしゃって学生のノートを覗き込まれる。先週の授業で脱落してしまったときなど、ノートにはほとんど何も書いていないので、そんな時に先生に尋ねられると本当に恥ずかしい思いをしたものである。

大学院に進学してからは、私のテーマは市瀬先生の御専門とは離れていたが、それでも先生に指導していただいた。修士論文の研究のために先生

に相談を持ちかけたところ、先生からはいつもの確な御助言をいただいた。先生には失礼だが、どうして自分の専門とは違っている学生をこんなにも的確に指導できるのか驚き、また、将来自分が指導するような立場になった時、果たして先生のように指導できるようになるのか疑問に思い、不安に思うことも少なからずあった。

先日、講義の風景を写真撮影するお手伝いのために、数年ぶりに先生の授業にお邪魔した。相変わらずの様子で、授業の始まりには学生に進み具合を尋ねられ、淀みなくお話をされ、黒板のあちこちに書かれていた。変わらずの市瀬節に、先生の教員生活の数分の一の間お付き合いさせていただいたことに改めて感慨を覚え、今後とも変らぬ御活躍を願うのである。

市瀬先生 ありがとうございます

浦田 慈子（地理学教室助手）

市瀬先生、長年のご奉職お疲れさまでした。先生にお世話になりました一学生として、お礼申し上げます。私も他の卒業生・現役学生さんと同様、市瀬先生の地形図読図の授業の指導の様子が、頭の片隅に忘れがたいものとして残っています。学生時代は講義のみのご縁でしたが、その後思いがけず地理学研究室の助手として先生のお手伝いをさせていただく機会に恵まれました。といっても、私の方はろくに先生のお手伝いなんてしたことはなく、逆に先生に気を使っただけの方だったような気がします。

○曜日の朝の出勤時、外濠公園をボケーッと歩いていると、「浦田さん？ おはよう」と声をかけて下さいました。「後ろからみて浦田さんかなー、と思ったけど、やっぱりそうだったね。ははは…。」先生はとても歩くのが速いので、後ろから追いつかれてしまうわけです。

夕方、先生が5時限目を終えてからお会いするようなときは、「遅くならないうちに帰りなさいね。」と声をかけて下さいます。

そんな優しい言葉をかけてもらえなくなるのはとても残念ですが、市瀬先生、本当にありがとう

ございました。お仕事を終えて、これからはのんびりした時間をお過ごし下さい。今まで通りのお

元気な様子で、野山歩きを楽しまれるのを想像しています。